

グリーン交悠録



長嶋茂雄氏との出会い そしてゴルフが取り持つ 財界人たちとの縁

本誌主幹

大 中 吉 一

浜野ゴルフクラブ

長嶋茂雄氏との グリーン交悠録

以前にもお話しましたが、今回のグリーン交悠録は長嶋茂雄氏との出会いから始めたいと思います。

長嶋さんは千葉県のご出身で、千葉県立佐倉第一高等学校で未来を嘱望される存在として知られていました。その長嶋さんに目を留め、立教大学への進学のを拓き、さらに読売巨人軍への入団を後押ししたのが、インドネシアの戦後補償問題で大きな働きをした『東日貿易』の社長、久保正雄氏でした。久保さんは、ジャズに造詣が深く、彼の葬儀にはあのサミー・デイヴィス・ジュニアがわざわざ焼香のために来日したほどです。ちなみに当時のインドネシ



長嶋茂雄氏の読売巨人軍への入団を後押ししたのが久保正雄氏だった



インドネシアの
スカルノ初代大統領

アのスカルノ初代大統領とデイヴィ夫人を結びつけたのも久保さんでした。久保さんとの出会いは伊藤忠商事の瀬島龍三氏がきっかけで、瀬島氏は久保さんのインドネシアにおける活動を後押ししていたのです。

長嶋さんは、瀬島氏を大変尊敬しており、1981年に巨人軍の監督を辞された際には瀬島氏から「広い世界を勉強してから野球界に戻るべきだ」とアドバイスされ、12年間の浪人生活を送ることを決心したのは有名な話です。

伊藤忠商事が青山に本社を移転した際には、瀬島氏から「いつもご馳走になっていくから、今回は新しい本社ビルでご馳走する」とお誘いを受け、長嶋氏と中山正暉衆議院議員をお連れしました。その際に瀬島氏から、大の巨人ファンとしてご紹介



カレドニアン・ゴルフクラブ

いただいたのが、後に伊藤忠商事の社長となる室伏稔氏でした。彼は、当時伊藤忠商事の業務部長でしたが、その後専務になり、そして米国の伊藤忠商事の社長を経て本社に戻られました。

室伏さんは米国時代にジャック・ニクラス氏の薫陶を受け、米国のゴルフを十分に吸収し、ハンディ6にまでなられました。

室伏さんとは千葉県のある『カレドニアン・ゴルフクラブ』で私が主催するゴルフ会において、グリーン交悠録を重めました。『カレドニアン・ゴルフクラブ』は英国・スコットランド発祥の『リンクス思想』を基盤

とする戦略型のコースです。リンクスとは、海沿いに存在し、自然の地形を利用した平らで砂地の多いゴルフ場を指すとされますが、小さく深いバンカーを数多く設置するなど、いくつかの定義を満たしていないければ、リンクスとはならないそうです。ちなみに、ゴルフ発祥の地とされるスコットランドでは、ゴルフコースそのものを『リンクス』と呼びます。

室伏さんは伊藤忠商事を退社されると日本政策投資銀行総裁として民間化に尽力され、2008年には民間化された日本政策投資銀行の初代社長に就任されました。また、ゴルフの方でも、名門『小金井カントリー倶楽部』の理事長になられるなど、大きな功績を残された方です。

日本の高度成長を支えた財界人たち

こうしてゴルフを媒介に広がった人脈の中で、長嶋さんとは爾来長らくゴルフを一緒にするようになり、『スリーハンドレッドクラブ』で年に数回『グリーン交悠録』を重ねる



小金井カントリー倶楽部

ようになりました。

『スリーハンドレッドクラブ』は、そもそも東急の五島昇氏が御子息のために作ったコースであることは先月お話ししましたが、『スリーハンドレッドクラブ』では瀬島龍三氏とも年に数回の『グリーン交悠録』を重ねました。

その『スリーハンドレッドクラブ』の生みの親である五島氏は、日本商工会議所の会頭を務められた日本を代表する世界的な経営者です。

「東アジアの安定なくして日本の安定はない」という持論の下、アジ

ア太平洋経済協力会議（APEC）やそれ以前の太平洋地域の財界人をもつて構成される民間国際フォーラム（PBECC）で大きな役割を果たされました。

現在は残念ながら東南アジアにおける日本の存在価値が薄れているように思います。日本はきちんと体勢を立て直し、日本がアジア諸国から尊敬されるような存在となり、アジアのリーダーとしてG7に名を連ねるようになることが必要だというのが私の持論なのですが、そのためには我が国の安全保障のあり方をきちんと立て直し、貿易立国としての成功をアジア諸国に教示できるような事例を重ねていかなければなりません。

いまこそ、政財界の面々が先人たちに学び、次代の日本のあり方を模索し、開拓していかなければならない時なのだと思います。

そういうえば、長嶋さんと最後にお会いしたのは長嶋さんが脳梗塞で倒れる2週間程前、『浜野ゴルフクラブ』でした。自宅で倒れたと同じでしたが、ご快癒をお祈り申し上げます。